ほんない歴史通信

第４３号
2007.6.1

高校での「道徳」の授業について

高校生に対して、茨城県は、平成十九年度から「道徳」の全校履修を行います。全国に先駆けて、初めて、高校の授業の中で「道徳」を実施します。

なぜ、今、「道徳」なのでしょうか。それは、「金あふれ、モノあふれ、豊かな社会を実現した日本で、高校生のモラルや規範意識、学習に取り組む意欲の低下などが叫ばれています。そのために、高校生が自分の人生や生きることについての意味などを深く考え、いかに目的意識を持って高校生活を送ることができるかが課題」となっているからです。

授業の内容の一つに「先人の生き方から自分の在り方や生き方を見つめ、人生について考えること」があります。

そこで、大子地方に大きな影響を与えた五人の人の生き方を紹介したいと思います。

1　中島藤右衛門　（１７４５～１８２５）

藤右衛門は、ある日、畑で、鍬で切断され日光に干されて白く固まったコンニャクの切れはしを見かけました。これからヒントを得て、生玉を薄く切って篠串に刺し、天日で干し、これを水車で搗いて粉末にする「粉コンニャク」を作ることに成功しました。後に、「なせばなり　なさねばならず　なるわざをならずと捨てる　人のはかなさ」と歌われています。

2　旅沢藤次衛門

黒沢の藤次衛門が明和年間（１７６４～１７７２）に遠州（静岡県）の秋葉神社や蓬莱寺にお参りしたとき、境内付近にそびえる大森林を見て、「自分のふるさとにも大森林をつくろう。子どもにも孫にも植林の仕事を続けさせよう」と心に決め、黒沢に帰ると、八溝の山々にスギやヒノキの植林を始めました。藤次衛門は一生を植林の仕事にささげたのです。

3　藤田文治郎・吉成　誠・吉成　賢

室町時代末とも、慶長年間（１５９６～１６１４）に左貫の石附兵次が宇治から持ち帰った茶実を植えたとも言われます。その後、藤田文治郎や吉成誠、吉成賢が、茶の栽培や製法を改良して、産業発展につくしました。

誠は、「当地方の茶業は耕地面積が他産業より小さいので、品質中心の高級茶の生産でいくべきだ」と言っています。

4　根本　正（１８５１～１９３３）

昭和二年三月に水戸大子間が開通、昭和五年に大子東館間が開通、茨城県内での全線開通を記念して、根本正の胸像を十二所神社境内（だいご小学校校庭）に建立しました。碑文には根本の「国の為め　鉄をもとかす真心に　なそならざらん　くろがねの道」の歌が刻まれています。衆議院議員の根本は水郡線建設に情熱を燃やし続けたのです。

5　黒田　一（１８９９～１９９６）

「馬が軍馬にとられたのを忘れないように、記念にリンゴを植えよう」。小生瀬は、大子でも特に寒く、昼と夜の寒暖の差が大きいところです。昭和十九年三月、リンゴの苗木を植えました。昭和二十三年には、リンゴの実がなり始めたのです。黒田は、「子や孫に幸多かれと祈りつつ　前田の里に　我は朽ちなむ」と日記に書いています。

「大子地方の先人の生き方」を学ぶことによって、郷土を愛する心、しっかりした生活態度、自分の生き方、目標が身に付くよう頑張ってほしいと思います。

（野内）

絢爛豪華な宮本集落の稲荷神社

上野宮の近津神社の境内に鎮座する稲荷神社は、元は地元宮本集落の益子姓の氏神であったが、今は本多姓を除く集落のほとんどがその氏子になっている。左隣の天神様は同じ宮本集落の本多の姓の氏神である。

平成十八年四月十六日（日）のこと、境内の樹齢数百年のイチョウの大木の枝が折れて度々神社の拝殿を壊すので、イチョウの大木を伐ることになった。そこで両神社を一時避難のため移動することになった。その折、地元の方から「稲荷神社の彫刻が見事なので是非見に来てほしい」との話があって行ってみた。宮本集落の全戸総出で本殿を慎重に避難させ、イチョウを無事伐り倒した。そして十一月には本殿の一部修理と拝殿の全面改修も終わり完成した。

稲荷神社は山城（京都）の伏見稲荷大社を本宮としてその分霊が全国津々浦々の集落から屋敷神に至るまで身近な神様として祀られている。祭神は倉稲魂命（宇迦魂命）で百穀に恵みをもたらす五穀豊穣の神である。ここの稲荷神社がいつの頃に創建されたかは無格社のため記録がなく定かではないが、社殿の造作からしてかなり古いと思われる。

暮れに地元の益子一雄さんの案内で稲荷神社を訪ねた。

本殿は流れ造りで基礎から棟まで高さ九尺、屋根は五枚重ねの木端葺きで軒先は地垂木と飛えん垂木の二重垂木になっている。光拝には龍と牡丹の彫刻、頭貫には象の顔をした木鼻と唐獅子が四個ずつある。柱の上には四角い斗の形をした大斗（斗栱）と呼ばれる組物、棟木や桁の木口を隠す懸魚が六個下がっている。棟の両端の鬼瓦を付ける獅子口には鬼板が付いている。階段の手すりである昇り高欄と廊下の組高欄は一部修理されたが、擬宝珠柱は元のままである。

宮司の谷田部さんによると「ご神体は金弊の御幣と丸い石で、丸い石をご神体に祀るのは、人間でも何でも磨かれて完成すると丸くなる。伊勢神宮なども丸い石が祀られている」と言う。そう言えば暮れに益子一雄さんと稲荷神社に入った時に、拝殿の隅っこに漬物石大の石がポツンと一個あって妙な気がした。もしこれがご神体の丸い石なら本殿の中に納めないとならない。

朱に塗られた鳥居は、稲荷鳥居で京都の伏見稲荷大社の様式である。よく似ているのに明神鳥居があるが、稲荷鳥居には柱の上に円盤状の台輪が取り付けてあるのがその特徴で、ここ宮本集落の稲荷神社の鳥居にも台輪がついている。鳥居の額束には『正一位稲荷大明神』の扁額がある。

益子さんの話では「今は二十九軒でお祭りをしている」とのことだが、本殿の中に『明治三十年』に奉納された棟札があって、それによると当時は『益子姓、拾八名』でお祭りしていたようだ。また昭和四十五年の鳥居改修を記した棟札には氏子が『三十四名』に増えている。祭司も高梨さん、丹治さん、菊池さん（中の宮）、谷田部さんと変遷の様子が棟札からわかる。

益子さんによると「稲荷神社の祭礼は初午の日（二月）で、以前は代表がゴザや座布団を持っていって、赤飯や御神酒をあげて、ヤドにもどってオミキアゲをした。今はツカモトでやっている」と云う。

今回のイチョウの大木の伐採を機に、郷土の先人が遺されたこの一大遺産を守り子孫に伝えんと、浄財を募り社殿の改修に努められた宮本集落のオラが産土様に寄せる思いに心をうたれた。

（飯村尋道）

歌声ひびく明るい町を目指して（七）

―大子混声合唱団の足跡―

大子混声合唱団の多彩な活動ぶりをもう少し紹介しよう。

合唱団にとって、昭和三十五年はもっとも充実した年であった。第一回「よい歌を育てる運動」が行われた（本誌第四一号）のも、また出番が多く合唱団の存在を強く印象づけた第三回「秋の音楽祭」が行われた（本誌第三八号）のもこの年のことであった。かてて加えて、この年に合唱団は初めて全国レベルの合唱大会に参加している。

全国青年合唱大会がそれである。文部省や日本青年団協議会等が主催し、青年団の体育・スポーツ関係の全国大会として昭和二十七年に第一回目が開催された。当初はスポーツ中心であったが、逐次芸能文化部門を拡充して総合的な青年の一大祭典に発展していた。三十五年十一月八日から十一日までの四日間、東京の明治神宮外苑を中心に開かれた第九回大会では、陸上競技、バレーボール、卓球、柔道、相撲、剣道、演劇、合唱、美術展、生活文化展、意見発表等の部門で全国から集まった青年達が技を競った（『青春の譜―全国青年大会三〇年の歩み』）。

それに先だって、同年九月十一日には、水戸市の茨城会館で演劇部門と合唱部門の県予選が行われた。勤労青年が主役であるので学生は参加できず、また二十五歳という年齢制限があったためメンバーを集めるのに苦労したというが、何とか混声チームを編成し、大子混声合唱団として参加を果たした。演劇には五団体、合唱には二団体が参加し、審査の結果藤代町青年会演劇部と大子混声合唱団が優勝した（同年九月十三日付「新いばらき」新聞）。かくして、全国大会への出場が決まった。

合唱大会は十一月九、十の両日、東京虎の門の共済会館で開かれた。参加した一人、木村一夫さんは、「うれしいし、緊張した。階段で練習して、これなら大丈夫だと（川俣）雄司さんに言われて舞台に上がった」、という。川俣雄司さんの指揮の下、女十一人、男八人の混声チームは、会場いっぱいの聴衆の前でボルテニアンスキー作曲「天使ヘルビムの歌」とロシア民謡「黒い瞳の」の二曲を歌った。団長の石島康雄さんは、客席から仲間の奮闘ぶりを写真に撮っていた。審査の結果は第五位、審査員の評は「もうちょっとだ」、と。大会終了後は上野動物園に立ち寄り、大子へ戻った。

帰町してから国谷順一郎町長に報告したほか、同年十一月二十三日の第三回「秋の音楽祭」では、前記全国合唱大会出場曲の二曲を町民の前で披露した。また、全国大会への参加はやはり誉れであったのだろう、当該二曲を収録した「第九回全国青年大会県代表記念レコード」を川俣雄司総合音楽研究所が制作している。なお、翌三十六年になると主要メンバーが年齢制限を超えるため、全国大会への参加はこの一回で終わった。

翌昭和三十六年、この年にもユニークな取り組みがあった。前年六月に結成されたばかりの茨城交響楽団を招聘し、大子で演奏会を開こうとの試みである。ラジオ、レコード等を通じてではなく、生の演奏に接して直接音楽のもつ芸術性にふれようというのがその趣旨である。事前の準備から演奏会当日の運営まで、合唱団のメンバーがすべてこなした。

「昭和三六年度大子混声合唱団事業報告書」によると、六月二日に石島、川俣、池田数和さんら三人が水戸市で招聘についての交渉を行うことから始まる。茨城交響楽団にとっても、地方へ音楽の輪を拡げるチャンスと映ったに違いない。綿引義栄団長との交渉はまとまり、各種の打ち合わせ、合唱団内部での

打ち合わせが続く。同月二十七～二十八日には、台風の中を役員五名がプログラムに掲載する広告の募金集めに町内を歩いたと記されている。また、演奏会前日には大子一高から椅子を運び、会場の整備にあたった。こうして、七月二日、大子中学校体育館を会場にした茨城交響楽団大子特別演奏会の開会に至る。主催は大子混声合唱団、後援には大子町、大子町教育委員会、朝日新聞水戸支局、大子音楽愛好会が、協賛には大子町小中学校長会、大子一高、大子二高、大子地区労が名を連ねた。

国谷町長は、プログラムに寄せたメッセージのなかで、「オーケストラは地方ではなかなか接することが出来ないのに、この山間の町でその演奏会が開かれることは、町としても全く開びゃく以来で、音楽の町と云われて、音楽愛好家が非常に多く、またどんどん多くなっている当町として誠にふさわしい催しである」と、歓迎している。綿引団長も同じプログラムで、「団と致しまして此回の遠征演奏会は始めての試」みだと述べているが、条件の悪い山間地での難しさを乗り越え演奏会実現にまで漕ぎ着けたことは、まさに合唱団の熱意の賜であった。

当日は、約千二百人の人びとが体育館を埋めたという。大盛況である。演奏曲目は、ビゼーの「カルメン」、レハールの「金と銀」、モーツアルトの「小夜曲」、シューベルトの「楽興の時」、ローザスの「波濤を越えて」、ハイドンの「交響曲〝驚愕〟」等々、本格的な交響楽の音色に人びとは聴き入った。前出の池田さんは、この時を回顧して次のように述べている。「一番感動したのは茨城交響楽団を呼んだ時。最初に音が出た時は、本当、身体がしびれた。感激がありましたよ」、と。初めての大子特別演奏会は、成功裏に終了した。

生のオーケストラの魅力がよほど大きかったのか、三年後の昭和三十九年五月には二回目の演奏会が開かれている。（齋藤）

相川上郷地区の「邪鬼を踏まえる青面金剛像」

相川上郷地区（旧依上村）の集落を通る旧道「相川栃原線」の三叉路に、ブロックの壁に埋められた文字塔の道祖神がある。道標を兼ね、碑表に道祖神街、右馬とう、左とりのこ、天明六年（一七八六）丙午十一月と刻まれている。道祖神の下方の文字の「街」は何を意味するのか、疑問にもつ人もいるだろう。漢和辞典によると、街は「ガイ」「マチ」「ケイ」等と読み、「マチ」「チマタ（巷）」「離る」等と記されている。ここでの街は、「チマタ」である。チマタ（巷）は「分かれ道の意」である。したがって、石塔に刻まれている「街」は、「右馬とう」、「左とりのこ」への「分かれ道」であることを標示している。

道祖神街から左に約一〇〇余メートル位行ったところの右側に三輪公園への急な階段状の登り道がある。その右側の小高い土手を地元の人は庚申塚と呼んでいる。その庚申塚に大子町内や近隣町村でみられない立派な「獣（邪鬼）」を踏まえる六臂青面金剛像が建立されている。

青面金剛像は、庚申待にからんで建立されたものである。庚申信仰は六十日に一度めぐってくる庚申の日にその夜ねむると、体の中にいる三尸の虫が睡眠中に抜け出し、天に昇り、天の神様にその人のこれまでの悪行を報告し、命を縮めるので、命を守るために、その夜は寝ないで徹夜をするという長寿を願う信仰である。

道祖神街　天明6年建立

青面金剛像は、庚申待をする講の人たちによって供養や講を記念

寛保3年（1743）建立

供養や講を記念して建立するのが普通であるが、上郷地区の青面金剛像は個人によって建立されている。青面金剛像の左側面に寛保三癸亥年八月吉日、碑の裏側に斎藤次郎右衛門以孝と刻まれている。寛保三年は、西暦一七四三年であるから、今から二六四年前に建立されたものである。

青面金剛像の浮き彫りの像容は、三〇〇年近く経過しているにもかかわらず、屋根付きの覆いによって風化から守られてきているためか比較的よく保たれてきている。この像（本尊）は、上部に日輪と月輪があり、六本の手をもつ青面金剛象（六臂青面金剛像）である。六本の手は、三対になっている。説明の便宜上、上から第一手、第二手、第三手として手に持っている持ち物をみると、右の第一手に三股杵？、右の第二手に弓矢、右の第三手に剣、左の第一手に宝輪、左の第二手に弓、左の第三手に羂索をもっている。中央の青面金剛（本尊）は、忿怒の容貌をしており、細長い帽子をかぶり、袈裟のような衣を斜めにまとい、向脛を露出し、二本足で獣（邪鬼）を踏まえている。像の下側の左右に鳥（鶏）を配し、獣の下の枠の中には「みざる」「いわざる」「きかざる」の三猿が刻まれている。

上郷地区の庚申信仰は、江戸時代の寛保三年（一七四三）ごろから庚申の日ごとに行われてきている。講の構成であるが、天保年間の頃は、家数三十三戸位で実施していたようだが、時代の変化とともに、講を脱退する家もあり、近年に至っては、二十五戸、さらに平成に至っては近隣同士の農家七戸の構成であった。分家は入れなかった。

講を実施する場所は当屋（頭屋）の家であり、庚申の日にあたった当屋（頭屋）の家では、講が実施される部屋に「青面金剛像の掛け軸」をかけ、お煮しめをはじめとする季節の精進料理、酒、灯明などを用意する。さし割（会費）は、当屋と宿が順回りなので、お互い様であるから当屋もちであった。

六庚申のある年の庚申講は、特別の行事はないが、庚申様への参拝と飲食が主である。当屋の家に行く前に庚申塚にある庚申様（六臂青面金剛像）に参拝してから、その後当屋へ行く。当屋では青面金剛の掛け軸をかけ、灯明や神酒、季節の精進料理などを備えているので本尊（青面金剛像の掛け軸）の前で正座をして、家内安全、健康と長寿、五穀豊穣を祈願する。

参拝後は飲食を共にし、世間話や雑談をしながら酒を酌み交わす。だれかが「もう、酒はたくさんです」というと、ご飯と吸い物が出される。それを食べ、最後に掛け軸をはずし、飲食に用いた割り箸を袋に入れ、掛け軸と割り箸を入れた袋を次の当屋へ引き継いで講は終わりになる。七庚申のある年の最後の庚申の日は、六庚申の庚申講とは若干異なる。講の人達は庚申塚の庚申像の前に集まり、当屋が用意をした餅や六庚申で飲食に使用し、確保しておいた割り箸を供え、神主さんに依頼しておいた御幣束を納めて祈願をする。その後当屋に行き、六庚申と同じ振る舞いを行い、講は終わりになる。

相川上郷地区の庚申信仰行事は、庚申の日を厳しく守り、庚申様を健康長寿の神、作神として敬い、およそ三百年の長きにわたって続けてきたが、平成六年を最後に姿を消した。（小澤）

奥久慈茶の里公園和紙人形美術館
山岡草常設館がオープン

奥久慈茶の里公園内展示館が、平成十九年四月二十五日和紙人形美術館「山岡草常設館」として新たにオープンしました。

作者の山岡草（本名 山岡松太郎）は、紀州和歌山城近くの和歌山市内に生を受け、十一歳から華道を習い始め、二十三歳頃から和歌山市展・県展で上位の賞を受賞するなど、斬新なデザインで注目を集めるとともに、嵯峨流の師範として多くの門下生を指導していました。

昭和四十五年には和紙人形の創作活動を開始、昭和四十七年には華道の師範を捨てて上京し、目黒区内に工房を構え和紙人形の創作活動に専念しました。昭和五十四年には長い間の構想である作品の創作の場を求めて旅する途中で、夢に出てきた大子町山田の山家を発見、一人で移住し創作活動に没頭しました。以後「ひなびた美しさ」を追求して人形の制作に情熱を傾けました。その後、東京銀座ミキモトで個展を開くなど活躍し、平成七年多くの作品を残し六十五歳の生涯を閉じました。

残された作品は、遺族から和紙人形約六百体、屏風や板状の作品群約八十点、写真作品約九千枚が大子町に寄贈されました。寄贈を受けた大子町では、平成十三年三月に奥久慈茶の里公園内展示館の一部を「山岡草創作和紙人形館」に改装し、現在まで作品を公開してきましたが、寄贈された作品をより多く展示して、多くの皆さんに感動していただこうということで、この度、今までの展示館を全面改装して、新たに和紙人形館美術館「山岡草常設館」として開館しました。展示室の外には企画展示・体験工房室が併設されています。

また、今回の開館にあわせて写真集やポストカードが発刊されました。寄贈された写真作品から作られ、彼の写真に添えられていた言葉や題名から「いろは」順に編集されています。写真撮影について彼は、残されたノートの中に次のように書いています。「涙を流した感動に喜びを老いたる日に、もういちど、あの日、あの時の嬉しかった感動を味わひたきものと、不恰好に不慣れな手つきで仲間たちの尊い姿を一枚一枚真心を込めてカメラにおさめ記録に残している。野山で一緒に楽しく遊んだ数々の喜びを私が感銘した百分の一にも表現できないが、私の胸を打った純粋な心のままにお前たちの伝える心の山里賛歌を私は写真に残し、草の庵の日記に拙い文ではあるけれども、これからも心に映るありのままの姿を書きとどめていきたい。」（奥久慈の野に遊ぶ「私の山の歳時」より）

山岡草の作品は渾身の力でひねり絞って縛る。そこから生み出され形を人形にするもので「これが本当に和紙で作られたものか」と疑いたくなるほどの創作された和紙人形の作品群は、訪れたお客様に驚きと感銘を与えます。是非一度訪れて山岡草の世界に浸ってみませんか、職員一同お待ちをしています。

（鈴　木　徹）

編集人　斎藤　典生（茨城大学人文学部）
野内　正美（茨城県立大子清流高校）
石井喜志夫（元　教　員）
小澤　圀彦（元　教　員）
鈴木　徹（大子町教育委員会）
編集発行　遊史の会
大子町立中央公民館歴史資料室気付
久慈郡大子町池田二六六九番地
〒319-3551　☎0295（72）2627